



アイヌ語を母語としないアイヌ民族による言語テキストに見出される交差対句：民俗的修辞技法の継承

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): アイヌ民族, 交差対句, 民俗的修辞, アイヌ民族による日本語 キーワード (En): 作成者: 大喜多, 紀明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3311

アイヌ語を母語としないアイヌ民族による言語テキスト トに見出される交差対句 —民俗的修辞技法の継承—

大喜多 紀明

Chiastic structure found in the Japanese discourse texts by the Ainu race as the non-native speakers of Ainu —Inheritance of Ainu's folk-customs -

Noriaki OHGITA

要旨：本稿では、アイヌ語を生来の母語としない三名のアイヌ民族（上田トシ・富菜愛吉・達星北斗）による言語資料に関する分析を、アイヌ民族の民俗的修辞とされる交差対句の使用を確認する視点から行った。その結果、本稿で採用したテキストに関しては、交差対句の使用が見出された。このことは、アイヌ民族に特徴的に見出される修辞である交差対句の使用が、アイヌ語を母語としないアイヌ民族へと継承されていることを示唆する知見である。

キーワード：アイヌ民族 交差対句 民俗的修辞 アイヌ民族による日本語

1. はじめに

アイヌ語を母語とするアイヌ民族（本稿では便宜上「アイヌ第一世代」と呼ぶ）を話者とする言語テキストに見出される交差対句の頻用については、筆者の一連の論文で報告した。現在までの調査によれば、アイヌ第一世代によるアイヌ語の口承テキスト（大喜多 2012a: 181-213）および談話テキスト（大喜多 2012b: 133-144）、日本語談話テキスト（大喜多 2012d: 127-138）および日本語筆記テキスト（大喜多 2013a: 190-200; 2013b: 99-112）での交差対句の使用が確認されている。その一方で、アイヌ民族集団に属した生活を営みつつも、生来、アイヌ語を母語としないアイヌ民族（本稿では便宜上「アイヌ第二世代」と呼ぶ）を話者とするという観点に絞っての、彼らによるアイヌ語テキストおよび日本語テキストに対する交差対句の使用についての調査および考察は現在まで行われてこなかった。そこで本稿では、アイヌ第二世代を話者とするアイヌ語テキスト

ならびに日本語テキストを対象として、交差対句の使用に関する調査を行った。

一般的に、言語構造と、その言語を使用する民族の心性とは深い関わりがあるとされている（岡野 1997: 1-29）。無論、この点はアイヌ民族も例外ではなく、アイヌ民族の使用する言語的特徴と彼らの心性との関わりは密接であると考えべきである（佐藤 2002: 61-88）。

アイヌ民族の場合、対称性を基本とした彼らの世界観（櫻井 2012: 97-104）や地理認識における表現法（切替 2007: 35-56）などに確認されるような文化的特徴が見出されている。こうした対称性を重視する傾向性は、アイヌ民族の心性に一因すると考えられる。また、アイヌ第一世代が口承文芸や談話などで使用する修辞表現である交差対句や対句も、いわゆる対称性を重視した表現の一種であると筆者は考えている。このような、アイヌ民族に見出される、対称性の富んだ修辞技法（対句・交差対句）の頻用を、彼らにおける対称性を好む心性に一因していると筆者は解釈しており（大喜多 2012a: 181-213）、このことは本稿における前提である。

対応数が2対程度の交差対句に関しては、例えば、演説での修辞技法として使用される場合がある（Ambar 2012: 24-38）。しかしその一方で、対応数が多いものになると、むしろ、珍しい修辞技法であると言える。それに対して、対句法に関しては比較的に使用される修辞技法であり、その用例も多い（黄 2009: 1-18）。一般に対句法は文章にリズムを与え、かつ、人々の記憶に留める効果をもたらすとされる（鄭 2006: 57-68）。

アイヌ第一世代を話者とする言語テキストには、対句表現や交差対句表現が多く見られる。アイヌ第一世代が使用する対句表現については、金田一ら（金田一 1936）によるアイヌ語研究の萌芽期から現在に至るまで、多くの研究者によって紹介されてきた（本田 2009: 39-56）。その一方で、アイヌ第一世代が使用する交差対句の場合は、筆者による一連の論文（本稿3節）以外は皆無である。

さて、本稿における分析の手法である交差対句に注目した場合、取り分け、対応数の多い交差対句に焦点を絞ると、例えば聖書（村井 2009: 293-310）やシェークスピアによる書物（柿原 2011: 2-12）のような筆記言語資料での用例は確認されているのだが、取り分け、日本語の談話や筆記テキストにおいて日常的に使用される修辞技法であるとは言い難い。また、いわゆる「和人（日本人）」を話者とする一般的な日本語による談話や筆記テキストにおいて、その話者もしくは筆記者が、無意識的もしくは意識的に使用する可能性については対句法に比べると小さいと考えられる。このことから、アイヌ第二世代が使用するアイヌ語および日本語の構文における特徴を検討する場合、交差対句についての分析が指標として有効であると筆者は判断した。そこで本稿では、アイヌ第二世代を話者とするテキストを検討するに際し、交差対句法に注目しての分析を行った。

なお、本稿で使用するテキストは、アイヌ第二世代を話者とするアイヌ語によるテキスト（以下、本稿では、「第二世代アイヌ語テキスト」と呼ぶ）、日本語談話テキスト（以下、本稿では、「第二世代日本語談話テキスト」と呼ぶ）、日本語筆記テキスト（以下、本稿では、「第二世代日本語筆記テキスト」と呼ぶ）である。また、それぞれのテキスト

についての話者は、第二世代アイヌ語テキストが上田トシ、第二世代日本語談話テキストが富菜愛吉、第二世代日本語筆記テキストが達星北斗である。ここで、上田を話者とするアイヌ語テキストに見出される交差対句に関しては以前の論文（大喜多 2012c: 157-165）で紹介したのだが、アイヌ語第二世代によるテキストという観点では取り上げていない。本稿では、特に、アイヌ語第二世代という側面に注目した上で、再度紹介したい。

また、本稿では、テキストのジャンルをいわゆる口承文芸に属さないものを選択した。その理由としては、富菜および達星による資料には、日本語による口承文芸テキストは存在せず、専ら、いわゆる自然言語（富菜の場合は日本語談話テキストであり、達星の場合は日本語筆記テキストである）のみだからである。上田のものには、口承文芸と、口承文芸に属さない談話テキストが採録されているのだが、富菜や達星の資料とジャンルを揃えるために、上田の資料についても、本稿では既に採録されている談話テキストを採用した。

2. 分析の手法

本稿では、アイヌ第二世代における構文上の特徴を調査する際、アイヌ第一世代の場合（本稿3節）と同様、交差対句の使用の有無についての確認およびそこに見出される特徴についての分析を指標とした。なお交差対句は、下記のように、例えば、 $A \cdot A'$ 、 $B \cdot B'$ 、 $C \cdot C'$ 、 $D \cdot D'$ で示される「語」「句」「節」の対応が構文において同心円状に配列する形式を持つ修辞様式を言う。

$$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$$

続いて、アイヌ第一世代を話者とするアイヌ口承文芸テキストに見出される交差対句の事例を一例紹介したい。以下、アイヌ第一世代である貝沢ちきによるウウェペケレ¹「パナンペとペナンペがいました」（田村 1988: 4-11）である。ここで、下記の引用文では、筆者による下線と記号が付されている。

A パナンペ（川下男）とペナンペ（川上男）がいました。B 人間を見たこともない彼らは、C ふたりだけで暮らしていました。そして D 鹿でも熊でもとって家に運んで来て、何を食べたいとも 何を欲しいとも、思わないほど、何不自由なく暮らしていました。けれども、ふたりは熊の頭や鹿の頭をどう扱っていいのかわからないものですから、あちこちに熊や鹿を殺しても、E その頭をめちゃくちゃに捨ててばかりいたのです。

¹ ウウェペケレは、アイヌ民族の口承ジャンルとしての散文説話のことである。この「ウウェペケレ」という呼称は、アイヌ語の読みた日本語のカタカナをあてたものである。「ウウェペケレ」に対する異なる表記として、「ウエペケレ」も一般的に使用されるのだが、便宜上、本稿では「ウウェペケレ」という呼称を採用した。ただし、本稿の記載でも「ウエペケレ」という呼称が散見されるが、このことは、ひとえに引用元の文献で使用された呼称をそのまま記載したことによる。

ところが、ある時、F 舟に乗って、それから、海を通ってどこかへ行き、ふたりして舟に乗って、しばらく行って、どこかに行くと、天を突いてそびえている大きな山がありました。

そして、山のふもとの、砂原のある所に舟を揚げて、その天を突いてそびえている大きな山に登って行きました。

すると、きれいな長いカヤ原がありました。カヤ原の西のはずれに金の家、大きな家があり、そこに登って行って、こんな光景を目にしました。

家の東側に、G 天にとどくような大きなトド松が、二本立っていました。そしてそのトド松の上に、一本のトド松の上に、黄金の小鳥が木の中ほどまで下りたり上ったりしていました。そしてまた、もう一本のトド松のところに、銀の小鳥が木の中ほどまで下りたり上ったり下りたり上ったりしている様子が見えました。ふたりはそれを見て感心していました。すると、「だれも出迎える人もいませんから、お入りなさい！」という声がしました。

ですから、H たいへん、かしこまって、戸のごく下の方を開けて入りました。すると神様と見まがうばかりの立派な老人がいました。その下座には神様のような立派な老女がいて、上座下座に並んで座っていました。その向かい側に若い女性がひとりいました。そしてふたりはそこに入って行きました。そして、かしこまっていたところ、

I「お前たちはだれによこされて来たのでもないそれはこういうわけなのだ。鹿の頭や熊の頭を、お前たちはたくさんとっているが、鹿は神のようなものだが、鹿の頭や熊の頭を、お前たちはやたらに捨てている。そのことでお前たちをとがめて、それで、お前たちをここへよこしたわけなのだ。私は海の神だ。そしてこのようにお前たちがするのを見て、お前たちをとがめるために、お前たちを来させ、私のもとへよこしたわけなのだから、これからは、ユッサパウンニというもの、それからカムイサパウンニというものを作って、（祭壇を作って）祭壇というものを作って、そこに、ユッサパウンニとカムイサパウンニを作って、そこに、鹿の頭も熊の頭ものせ、木幣を作って（祭る）ならば、お前たちはよいものになる。そうしなければ罰せられるためにお前たちは来た、お前たちを私のもとへよこしたというわけで、お前たちは来たのだよ。お前たちはそうするか、どうだ？」と、その神様のようなお方、老人が言いました。

I' そこで、パナンペとペナンペはこう考えました。

「とがめを受けるより、言うとおりにしたほうがよさそうだ！」と考えて、

「その、ユッサパウンニとカムイサパウンニの作り方を教えて下さったらそのようになりますから」とパナンペとペナンペが言いました。すると、「こういうふうに、こういうふうにして作るのだ。祭壇もこういうふうに、こういうふうにして作るものだよ。お前たちもこのようにするんだよ」と、その老人が言いました。

H' それからそのようにすることを承諾して、ふたりは外へ出ました。

すると、あとから、外へ出たふたりのあとから、その神様のような老人が、こう言いました。

「G´ここに、外にいる小鳥を一羽ずつお前たちにやろう。黄金の鳥を一羽、銀の小鳥を一羽、二羽お前たちにやるから、大切に持って村へ帰るのだよ。そして一緒に暮らすのだよ。」

村へ帰れば鳥たちは、だんだんに美しい女の人になって、お前たちはその女たちと一緒に暮らすようになるのだよ。そうすれば、人間がふえるいわれ、人間がふえる元になって、これから人間の系統が広がる元になるのだから、そのようにするのだよ」

と（いう声が聞こえました）その神様のような老人が言いました。そして、それからふたりは、その、黄金の小鳥を一羽、銀の小鳥を一羽ずつ取って、持って、F´今度さっきの、舟のところへ下りて行って、舟を漕いで、そのパナンペとペナンペの家に戻って来ました。

そうしたらすぐに、それこそ神様のようなふたりの若い女性になって、今度私たちはそれぞれ妻にめとって、そうして暮らしているうちに、その女性たちに子供が生まれました。

それから私たちは E´鹿でも熊でもとって家に運んで来て、言いつけられたことですから、祭壇というものも作り、ユッサパウンニも作り、カムイサパウンニも作って、そのための祭壇を作って、そこに置きました。

D´それからというものは、どういうわけだか、私たちは前にも後にも、獲物が天からおろされるように、どんどんとれる人になって暮らしている間に、C´その若いふたりの女性をそれぞれ妻にめとって、それから子供が沢山できて、それがもとになって、B´人間がふえて系統が広がったわけ、起源なのですから、話して聞かせましたと A´パナンペとペナンペが言いましたというお話よ。

このテキストの下線・記号を配列すると、以下のような交差対句の図式として示すことができる。なお、ここでの図式は大喜多（2013c）の引用である。

- A パナンペとペナンペの紹介
- B 人間を見たこともないパナンペとペナンペ
- C ふたりだけで暮らしていた
- D 何不自由なく暮らしていた
- E 祭壇のない生活
- F 舟で移動
- G 金と銀の小鳥
- H 「海の神」の家に入る
- I 祭壇等を作る必要性を「海の神」が伝える
- I´ 祭壇等を作ることを承諾
- H´ 「海の神」の家を出る
- G´ 金と銀の小鳥

- F´ 舟で家に戻る
- E´ 祭壇のある生活
- D´ 豊かな生活
- C´ 家庭ができる
- B´ 人間が増える
- A´ パナンペとペナンペが言いました

3. 先行研究

本節では、アイヌ第一世代を話者とするアイヌ語口承文芸テキスト、アイヌ語談話テキスト、および日本語談話テキスト、日本語筆記テキストを対象として、そこに交差対句の使用を見出すことができた主なテキストの題名と、その事例が掲載されている論考を話者ごとに紹介する。なお、口承文芸の場合は、該当するテキストが属するジャンルごとに記載している。また、テキストの題名については、出典元の文献に記載されたものを、本稿ではそのまま採用している。

アイヌ語による口承文芸テキスト

カムイユカラ

《話者：知里幸恵》

- 「梟の神の自ら歌った謡「銀の滴降る降るまわりに」」：大喜多（2013d）
- 「狐が自ら歌った謡「トワトワト」」：大喜多（2012e）
- 「狐が自ら歌った謡「ハイクンテレケ ハイコシテムトリ」」：大喜多（2013d）
- 「兎が自ら歌った謡「サンパヤ テレケ」」：大喜多（2011）
- 「谷地の魔神が自ら歌った謡「ハリツ クンナ」」：大喜多（2012f）
- 「小狼の神が自ら歌った謡「ホテナオ」」：大喜多（2012e）
- 「梟の神が自ら歌った謡「コンクワ」」：大喜多（2013d）
- 「海の神が自ら歌った謡「アトイカ トマトマキ クントテアシ フム フム！」」：大喜多（2013d）
- 「蛙が自らを歌った謡「トーロロ ハンロク ハンロク！」」：大喜多（2012e）
- 「小オキキリムイが自ら歌った謡「クツニサ クトンクトン」」：大喜多（2011）
- 「小オキキリムイが自ら歌った謡「この砂赤い赤い」」：大喜多（2012e）
- 「獺が自ら歌った謡「カップパ レウレウ カップパ」」：大喜多（2013d）
- 「沼貝が自ら歌った謡「トヌペカ ランラン」」：大喜多（2012e）

メノコユカラ

《話者：小川シゲノ》

- 「スズメの酒盛り」：大喜多（2012a）

《話者：平村つる》

- 「スズメの神」：大喜多（2012a）

「小沙流の人」：大喜多（2013e）

ウウェペケレ

《話者：貝沢ちき》

「パナンペとペナンペがいました」：大喜多（2013c）

《話者：平賀サダモ》

「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」：大喜多（2012g）

《話者：平村幸作》

「平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました」：大喜多（2012c）

《話者：平村つる》

「私は石狩に住む女です（和人の夫をもった石狩の女の話）」：大喜多（2012b）

《話者：松島トミ》

「ハリギリで舟を作った男のウエペケレ」：大喜多（2013e）

「クモと結婚した白キツネのウウェペケレ」：大喜多（2013b）

トゥイタ_ハ

《話者：浅井タケ》

「カニの話（*takahka tuytah*）」：大喜多（2013e）

「さらわれた娘 - 84（*haciko monimahpo* - 84）」：大喜多（2013c）

「箱流しの話（*haku monka tuytah* - 88）」：大喜多（2013c）

「フンドシをとられた話（*tepa tuytah*）」：大喜多（2013c）

「カラスと娘（*etuhka neewa monimahpo*）」：大喜多（2013f）

アイヌ語による談話資料

《話者：鳩沢ワテケ》

「日常会話」：大喜多（2012b）

「挨拶口上」：大喜多（2012c）

《話者：平賀サダモ》

「日常会話」：大喜多（2012b）

《話者：二谷善之助》

「挨拶口上」：大喜多（2012c）

日本語による談話資料

《話者：萱野茂》

「談話資料」：大喜多（2012d）

《話者：杉村満》

「談話資料」：大喜多（2012d）

日本語による筆記資料

《筆者：知里幸恵》

『アイヌ神謡集』「序」：大喜多（2013a）

「日記」：大喜多（2013b）

本節で示した、アイヌ第一世代の話者（もしくは筆記者）による一連のテキストでは、いずれも、交差対句が主要な修辞技法として使用されていた。

4. 話者および筆記者について

本稿では、第二世代アイヌ語テキスト、第二世代日本語談話テキスト、および、第二世代日本語筆記テキストの構造を、交差対句の使用を調査する視点から行う。なお、第二世代アイヌ語テキストについては上田トシを、第二世代日本語談話テキストについては富菜愛吉、第二世代日本語筆記テキストについては違星北斗をそれぞれ話者（もしくは筆記者）としている。さらに、本稿において筆者は、話者（もしくは筆記者）における次の2点について特に注目した。

基本的にはアイヌ民族集団の中で育ち、かつ、話者自身は、アイヌ民族としての自覚を持った生活をしていた。（本稿ではこれを「条件 Ⅰ」とする）

アイヌ語を日常生活における生活言語として使用せず、かつ、アイヌ語を生来の母語としない。（本稿ではこれを「条件 Ⅱ」とする）

ここで、条件 Ⅰ および条件 Ⅱ を満たした話者を、本稿ではアイヌ第二世代とした。

以下、上田・富菜・違星を紹介した文章を引用する。その中で、上記の2点（条件 Ⅰ および条件 Ⅱ ）に該当すると筆者が判断した箇所には、筆者による丸数字（ Ⅰ および Ⅱ ）と下線を施した。

4.1. 上田トシについて

上田は1912年、沙流郡平取村（北海道沙流郡）に生まれた。上田自身は、もともとアイヌ語を話すことができなかったのだが、後にアイヌ語を習得し、アイヌ口承文芸の著名な話者となった。また、アイヌ語の伝承者としても広く知られている（アイヌ民族博物館 1997）。

上田に関する条件 Ⅰ および条件 Ⅱ については、『上田トシのウエペケレ』（アイヌ民族博物館 1997）に書かれた次の文章を筆者は参考にした。

上田トシさんは、1912（大正1）年10月3日、沙流郡平取村字ペナコリで、川上サノウク（父） なんとく（母）の7人兄弟の末っ子として生まれました。
父の川上サノウク氏は近隣に名高いニシパ（人望のあつい裕福な男性）でした。カムイノミ（神への祈り）を行いアイヌプリ（アイヌの風習）に通じる反面、辺りに先駆けて2頭引きの馬でプラオを使って耕作するなど近代的な農業経営を実践しました。長く部落部長を務め、明治41年には荷負尋常小学校開設のため、1町2反余の土地（校地の4分の3以上）を提供するなど住民の教育向上に献身された方と

して有名です。

また、12 歳年上の姉、故木村キミさんもアイヌ口承文芸の伝承者として知られ、1987 年には北海道文化財保護功労者賞を受賞されています。

上田トシさんは、このようにアイヌの伝統文化をしっかりと受け継ぎつつ、時代の流れにも敏感に対応するという、エネルギーに満ちた家庭環境で育ちました。

けれども、父のサノウク氏が家庭の中で日常的にアイヌ語を使うことを嫌っていたこともあり、幼い頃には全くアイヌ語を話しませんでした。子どもの頃、一番の仲良しだったのは同じペナコリ出身の川上まつ子さんでした。川上まつ子さんも大変アイヌ語に堪能な方で、数多くの優れた伝承記録が残されています。しかし、いつも二人で木登りをしたりヤツメウナギを捕まえたりして遊んでいたにもかかわらず、アイヌ語で会話することはなかったといえます。《後略》

さらに、上田自身は次のように語っている。

私はなにか物を知っている年寄りというわけでもないのですが、どういうわけか若者たちや女の人たちが私を訪ねてきてくださるので、私はそのことをたいへん嬉しく思いながらアイヌ語でおしゃべりをしています。

アイヌ語といいましても急にわかったものではなく、私は最初はアイヌ語を知らなかったのです。けれどもなんとかしてアイヌ語を覚えたいので、歩きながらもアイヌ語で独り言をいいながら歩き、寝ていて目が覚めてもアイヌ語ばかり考えながら暮らしているうちに、今はもう年をとりました。

私が元気でまだお話することができる間に、アイヌ語でもウエペケレでも言いますから、和人の若者や和人の女性、アイヌの若者、アイヌの女性、だれであっても、私のウエペケレやアイヌ語をよく聞いて役立ててください。そのことだけを私は思っています。ありがとうございます。

4.2. 富菜愛吉について

はじめに、富菜についての紹介が書かれた小川の論文（小川 2003: 117-145）の一部分を引用する。

富菜さんは杵臼の地に生まれ育ち、杵臼尋常小学校を卒業後、西舎の高等小学校に進んだ。当時、この地でのアイヌの家庭からの高等小学校進学は稀なことであり、富菜さんによれば、そこには父親の強い意志がはたらいていたということである。高等学校卒業後は青年団でも旗手をつとめるなど熱心に活動し、徴兵検査を受け歩兵第25連隊に入隊、兵役をつとめた後は在郷軍人会の活動などにも従事した。青年団、軍隊、在郷軍人会のそれぞれの活動において表彰歴を有している。

敗戦後のアイヌ協会結成の動きの中で、浦河支部発足の準備段階から参画、静内で

開催された協会の創立大会にも出席し、支部の会計書記という仕事をつとめたということである。

富菜は、1916年に生まれ、浦河町杵臼（北海道浦河郡）に暮していた。条件 および条件 にまつわる話としては、次に示す、小川・大谷との会話（小川 2003: 117-145）に記された富菜自身の言葉による証言を筆者は参考にした。

（小川）でも、変な言い方ですけど、ここに集まっている人のね、かなりな人はアイヌ語知ってますよね。単語聞いたことある、とかいうぐらいで言っちゃえば。

（大谷）大部分の人が。

（富菜）アイヌ語知っているよ、みんな。おれしゃべれないけど、俺だって聞くくらいだったらだいたいわかるもの。しゃべれ、ったらできないけどな。

（小川）お父さんがわりとそうだった、お父さんがわりとそういうふうに、もう覚えなくていいっていう...

（富菜）覚えなくてもいい、って〔いうことで〕言わないんだよ。一言も言わない人だった。まごばあさんも、母親も。

（小川）子供の前では言わない...

（富菜）ぜったい言いません。そして、そうすれとも、また、教えない。「アイヌはやめれ」つうんだから、うちの親父は。

《中略》

なんぼもない。だけど、その、わりとね、アイヌ差別だとか、アイヌのヘカチとかポンチョとかって言われたってね、昔、今でも差別扱いで騒ぎやってるけどね、この部落にはそういうことなかったの。シヤモの中さ入って、俺が、そのアイヌのど真ん中、中にいて対抗して負けてないからね、学問してって走ったって何やったって人に負けてない。そういうウタリが多かったからね、軽蔑されて馬鹿にされて苦しめられたウタリはいなかったわけさ。そこらへんは立派だと思ってるよ。野球だって3年生からやったから

4.3. 遼星北斗について

遼星北斗は歌人であり、本名は遼星滝次郎という。遼星は1901年に余市（北海道余市郡）で生まれた。遼星に関する条件 および条件 については、下記の、伊波普猷による「目覚めつつあるアイヌ種族」（伊波 1976）に記載された記事を筆者は参考にした。

「私は遼星といふアイヌです。私が生れた所は札幌に近い余市といふアイヌの村落ですが、この村落は早く和人に接触したのと、そこから中里徳太郎といふ、アイ

ヌキツの豪傑を出したのとて、アイヌの村落中で一番能く日本化した所です。小民族が大民族に接触する場合にはどこでもさうでせうが、そこには幾多の悲惨な物語が伝えられてゐます。私の母は若い時分に和人の家で下女奉公をしてゐましたので、日本語が非常に、上手でした。母は夙に学問の必要を感じて、家が貧乏であつたにも拘らず、私を和人の小学校に入れました。この時全校の児童中にアイヌの子供は三四名しか居ませんでしたので、アイヌ、アイヌといつて非常に侮蔑され、時偶なぐられることなどもありました。学校にいかないうちは、餓鬼大将であつて、和人の子供などをいぢめて得意になつてゐた私は、学校へいつてから急にいくぢなしになつて了ひました。この迫害に堪へ兼ねて、幾度か学校を止めようとしたましたが、母の奨励によつて、六ケ年間の苦しい学校生活に堪へることが出来ました。もう高等科へ入る勇氣などはとてもありませんでした。私は地引網と鰯とを米櫃としてゐた父の手伝へをして、母がいつも教訓してゐた、正直なアイヌとして一生をおくる決心をしました。

《中略》

爾来私は言語風俗習慣の点に於て、和人と寸分も違はないやうになるのが気がきいてゐると考えて、事毎に模倣をこれ事としました。内地から来る観光団が余市にやつて来て、その日本化してゐるのを見て、何だ、ちつとも違はないぢやないか、と失望して帰るのを見て、幾度腹を立てたか知れません。かういふ調子で、私はアイヌといはれるのを嫌ひ、アイヌ語をあやつるのを恥ぢたので、かんじんな母語を大方忘れて了ひました。

《中略》

私は彼に、雑誌を出して思想を宣伝するのでもいい、著書をして、アイヌを紹介するのもいい、中等程度の学校を設立する運動をするのでもいい、けれども君等の同族に取つての目下の急務は、同胞の間に這入り込んで、通俗講演をやることである、かういふ啓蒙運動は、いはゞ鋤をもつて土地を耕すやうなもので、かうして一種の気分が出来た暁でなければ、君等が蒔く思想の種子は芽を出すものではないといひましたら、さういふことは始めて聞くが、是非さうしなければならないと思つてゐる。けれども自分はアイヌ語を全く忘れてゐるので、さういふ肝腎な場合には、とても間に合はない、どうしたらいいか、といつて、ひどく悲しみました。

なお、上記の「目覚めつつあるアイヌ種族」を引用した3片の断章の内、はじめの2片は、違星の講演の抜粋箇所であるので、ここでの一人称は違星である。一方、3番目の断章は伊波が一人称である。

ここで、本節で示した、3 名（上田・富菜・達星）に關しての紹介が書かれた文章に對して筆者が下線を施した箇所を見る限り、この 3 名は、条件 および条件 を満たしている。したがって、上田・富菜・達星は、本稿におけるところのアイヌ第二世代に該当する。

5. テキストについて

本稿では、アイヌ第二世代である上田・富菜・達星を話者もしくは筆記者とする言語資料をテキストとする。まず、第二世代アイヌ語テキストに關しては、上田を話者とする「挨拶口上」(アイヌ民族博物館 1997)を使用する。続く、第二世代日本語談話テキストについては、富菜を話者とする「会話資料」(小川 2003: 117-145)を、そして、第二世代日本語筆記テキストとしては、達星が執筆した「アイヌの姿」(達星 1995)の一部分を使用している。以下、それぞれのテキストを示す。

5.1. 上田トシの「挨拶口上」

第二世代アイヌ語テキストとして、本稿では、『上田トシのウエベケレ』(アイヌ民族博物館 1997)に記載された、上田によるアイヌ語での挨拶の日本語訳文を使用する。なお、この上田の挨拶を、本稿では便宜上、上田の「挨拶口上」と呼ぶことにする。上田の「挨拶口上」については、筆者による以前の論文(大喜多 2012c: 157-165)で紹介し、そこに見出される交差対句を示したのだが、本稿でも上田の「挨拶口上」を再掲する。ここで、テキストに付された記号および下線は筆者によるものである。

上田の「挨拶口上」

A 私はなにか物を知っている年寄りというわけでもないのですが、B どういうわけか若者たちや女の人たちが私を訪ねてきてくださるので、C 私はそのことをたいへん嬉しく思いながらアイヌ語でおしゃべりをしています。D アイヌ語といいましても急にわかったものではなく、E 私は最初はアイヌ語を知らなかったのです。E' けれどもなんとかしてアイヌ語を覚えたいので、D' 歩きながらもアイヌ語で独り言をいいながら歩き、寝ていて目が覚めてもアイヌ語ばかり考えながら暮らしているうちに、C' 今はもう年をとりました。私が元気でまだお話することができる間に、アイヌ語でもウエベケレでも言いますから、B' 和人の若者や和人の女性、アイヌの若者、アイヌの女性、だれであっても、A' 私のウエベケレやアイヌ語をよく聞いて役立ててください。そのことだけを私は思っています。ありがとうございます。

5.2. 富菜愛吉の「会話資料」

第二世代日本語談話テキストとしては、小川(2003)に記載された、富菜らによる会話文を使用した。小川が富菜の言葉を採録した目的は、小川(2003)によれば「近現代アイヌ史研究の一環として、戦後間もない1946年(昭和21年)に結成された北海道アイヌ協会の活

動について、特に地域の活動に着目した記録の報告である。同時に、ひとりひとりの歩みの記録の集積を通じて近現代史を考え認識する手がかりを蓄積していきたいという報告者の考えにもとづく2回目の報告でもある。」とある。本稿では、この記録資料に記載された会話文の一部をテキストとした。なお、テキストに施した記号・下線は筆者による。ここで、下記の富菜らによる会話テキストを、本稿では富菜の「会話資料」と呼ぶことにする。

富菜の「会話資料」

(富菜)そして、その時に面白いのにはね、F なるほどアイヌらしいなと思ったんだけど、司会者があれ G 門別かどっかの人が来てるんだ、H 誰だかわかんないんだ、名前。I あとでね、道の事務局の偉い人になってた人だけども。向井山雄先生が、仮議長で始めたときに、「J どのような名称つけたらよろしいでしょう？」って、K こう言葉、出たのよ。そしたらね、座ってる、椅子、椅子でみんなこう、L 俺、M 4 列か…… 3 列か 4 列くらいの前からね、座ってた。M' そしたら、ひょっとしたここにね、大きな体格の、おっきなおやじ座ってたんだよ。L' おれ、どこの人かなあと思ってたんだけど。この人が「はい」って手あげて、「アイヌのことだから、アイヌでいいんでしょ」って、K' こう言った。「J' はいそれでは、アイヌという名称にしましょう」と。これで決まった。一発で決まった。それ、I' 後で調べてみたらそのおっさんな、そしたら、H' 鹿戸オ斗って……

(小川) ああ、それこそ日高門別の……

(富菜) うん、G' 門別の軽種屋。大物さ。

(小川) 村会議員やった…

(富菜) はい。こうなってる〔と、体格の大きさを身ぶりで示して下さった〕。格好も言葉も体裁もないんだけどね、「F' アイヌのことだからアイヌでいいべい」では一発で決まった。忘れないんだ、そういうことは。

5.3. 違星北斗の「筆記資料」

第二世代日本語筆記テキストとしては、違星が執筆した「アイヌの姿」(違星 1995)の書き出し部分を採用した。なお、テキストに付した記号および下線は筆者による。ここで本稿では、下記の違星によるテキストを、違星の「筆記資料」とする。

違星の「筆記資料」

後藤先生

N どういふ風にかいたら O 今のアイヌに歓迎されるかと云ふことは臆げながら私は知ってゐます。にもかゝらず本文は悉くアイヌを不快がらせてゐます。

P 私は心ひそかにこれを痛快がってゐると同時に、悲痛な事に感じて居ります。これは今のアイヌの痛いところを可成り露骨にやつつけてゐるからであります。若しアイヌの精神生活を御存じない御仁が之を御覧になられたら、違星は不思議なことを言ふものか

なと思召されることでせう。Q 殊にコタン吟の「同化への過渡期」なぞに至っては益々この感を深うすることでせう。Q' アイヌを愛して下さる先生にかやうなことを明るみであばくことは本当に恥しいことであります。P' けれどもアイヌの良いところも（もしあったとしたら）亦悪いところも皆んな知って頂きたい願から拙文をもってアイヌの姿（のつもりで）を正直に書きました。なるべくよそ様へは見せたくはありません。O' それは歓迎されないからではありません。なぜ私は私さへも不快な事実を表白せねばならないか。その「ねばならぬ」ことを悲しむからです。N' 只々私の目のつけどころ（ねらひどころ）だけを御汲みわけ下さい。

6. アイヌ第二世代を話者とするテキストの構造

本節では、前節で提示した、アイヌ第二世代の話者によるテキストの構造を示す。それぞれのテキストに施された記号および下線箇所に応じての配列を、それぞれのテキストごとに本節では行った。

6.1. 上田の「挨拶口上」の構造

上田の「挨拶口上」に見られる交差対句については、以前、大喜多（2012c）で示したのだが、本稿では再掲する。ただし、交差対句における対応についての詳細は大喜多（2012c）に記載されているので、交差対句における対応の詳細についての説明は本稿では省略する。なお、本稿の場合は、それぞれの対応に記載されている事柄を簡略化している。

- A 私は知識がない
- B 若者たちや女性たち
- C アイヌ語でのおしゃべり
- D アイヌ語独習の労力
- E 最初はアイヌ語を知らなかった
- E' アイヌ語を覚えたい
- D' アイヌ語を独習
- C' アイヌ語でしゃべりたい
- B' 若者たちや女性たち
- A' 私の知識を役立ててほしい

上記のように、上田の「挨拶口上」では、主要な修辞技法として、5 対の対応からなる交差対句が使用されている。

6.2. 富菜の「会話資料」の構造

続いて、5.2.節に記載された富菜の「会話資料」における記号および下線箇所を配列すると次のようになる。

F アイヌらしいと思った
G 門別の人
H 名前がわからない
I 後で道の事務局の偉い人になった人
J どういう名称にするか
K こういう言葉が出た
L 俺
M 座っていた
M' 座っていた
L' 俺
K' こう言った
J' アイヌという名称にする
I' 後でその人を調べてみた
H' 鹿戸才斗
・・・小川の言葉・・・
G' 門別の軽種屋
・・・小川の言葉・・・
F' アイヌのことだからアイヌでいい

ここで、FとF'に関しては、「アイヌ」について言及した箇所であるという点で共通している。また、Gでは、「門別」から来た名前のわからない人について富菜がコメントしている。一方、G'では、その人が「門別の軽種屋」であるとしている。ここで、GとG'では「門別」という地名が共通しており、かつ、Gでの疑問がG'で解決している形式である。HとH'の関係もGとG'の関係と同様、Hに描かれた名前のわからない人物がH'に示された「鹿戸才斗」であり、かつ、Hでの疑問に対する回答がH'となっている。続く、Iでの「後で道の事務局の偉い人になった」人物と、I'における「その人」は同一人物である。また、I・I'の場合、「後で」という言葉の使用が共通している。また、JとJ'の関係については、Jが問題提起であるのに対してJ'はその回答として位置付けられる。

KとK'では、同じニュアンスの言葉が再現されている。これは、L・L'やM・M'でも同様である。L・L'では「俺」が再現されており、M・M'では、「座っていた」という言葉が共通している。

ここで興味深い点は、富菜の言葉が構成する交差対句に、2箇所での小川の言葉の挿入があることである。なお、富菜の「会話資料」に見出された交差対句は8対の対応を持つ。

6.3. 遼星の「筆記資料」の構造

最後に、遼星の「筆記資料」についてである。以下、5.3節に示した記号および下線箇所

を配列する。なお、以下の図式には、新たな記号（ $\sim$ 、 $\sim$ ）とそれに付随した下線が施されている。

N どういふ風に書いたら

O 今のアイヌに歓迎されるかと云ふことは臆げながら私は知ってゐます。にもかゝらず本文は悉くアイヌを不快がらせてゐます。

P 私は心ひそかにこれを痛快がってゐると同時に、悲痛な事に感じて居ります。これは今のアイヌの痛いところを可成り露骨にやっつけてゐるからであります。若しアイヌの精神生活を御存じない御仁が之を御覧になられたら、違星は不思議なことを言ふものかなと思召されることでせう。

Q 殊にコタン吟の「同化への過渡期」なぞに至っては益々この感を深うすることでせう。

Q' アイヌを愛して下さる先生にかやうなことを明るみであばくことは本当に恥しいことであります。

P' けれどもアイヌの良いところも(もしあったとしたら)亦悪いところも皆んな知って頂きたい願から拙文をもってアイヌの姿(のつもりで)を正直に書きました。なるべくよそ様へは見せたくはありません。

O' それは歓迎されないからではありません。なぜ私は私さへも不快な事実を表白せねばならないか。その「ねばならぬ」ことを悲しむからです。

N' 只々私の目のつけどころ(ねらひどころ)だけを御汲みわけ下さい。

ここで、Nに書かれた「どういふ風」と「私の目のつけどころ」は同じ意味である。OとO'では、 $\sim$ ・ $\sim$ における「歓迎」と $\sim$ ・ $\sim$ における「不快」が共通している。

Pにはまず、「痛快」と「悲痛」が書かれている。これは反対の意味を持つ言葉による対句である。一方、P'には、「良いところ」と「悪いところ」という反対の意味の言葉が書かれている。さらに、Pの「可成り露骨にやっつけてゐる」・「アイヌの精神生活を御存じない御仁」・「之を御覧になられたら」にそれぞれ対応し、P'には「正直に書きました」・「よそ様」・「見せたくはありません」が配置されている。

さらに、Q・Q'における「この感を深うすること」と「かやうなことを明るみであばくこと」は同じ意味の事柄であると言える。

以上のように、違星の「筆記資料」は4対の対応からなる交差対句による構成である。

7. 結果および考察

アイヌ第一世代の日本語談話資料に見られる語彙・音韻・文法に関する特徴についての研究は、以前、小野らによって行われた(小野 1992: 115-128)。そこで得られた知見は次の2点である。

音韻：アイヌ語の干渉が観察される。

語彙・文法：アイヌ語の干渉はほとんど観察されない。

一方、筆者は、アイヌ第一世代の日本語談話資料および日本語筆記資料を題材としての分析を、交差対句の使用を調査する観点により行った。その結果、アイヌ第一世代によるアイヌ語口頭資料に見出される交差対句の頻用という特徴が、日本語談話（大喜多 2012d: 127-138）および筆記資料（大喜多 2013a: 190-200; 2013b: 99-112）でも見出されることがわかった。

本稿では、3名のアイヌ第二世代である上田トシ・富菜愛吉・達星北斗を話者（もしくは筆者）とする言語資料についての分析を、交差対句の使用を調査する視点から行った。その結果、上田のアイヌ語談話テキストである「挨拶口上」、富菜の日本語談話テキストである「会話資料」、達星の日本語筆記テキストに関しては、交差対句を主要な修辞技法として使用していることが確認できた。この特徴は、アイヌ第一世代に関して現在までに確認されてきた修辞的特徴と一致している。したがって、ここで明らかになった知見は、アイヌ第一世代における交差対句の頻用という特徴がアイヌ第二世代に継承されていることを示唆している。

本稿で採用した3名のアイヌ第二世代の内、上田と富菜に関しては、家庭の中で親がアイヌ語を教育しなかったと証言している。このことについての上田に関する話は本稿 4.1.節で紹介したのだが、ここでも、該当箇所を再掲する。

父のサノウク氏が家庭の中で日常的にアイヌ語を使うことを嫌っていたこともあり、幼い頃には全くアイヌ語を話しませんでした。

一方、富菜についての、富菜自身の証言（4.2.節）の該当箇所を以下に再掲する。

（富菜）覚えなくてもいい、って〔いうことで〕言わないんだよ。一言も言わない人だった。まごばあさんも、母親も。

（小川）子供の前では言わない...

（富菜）ぜったい言いません。そして、そうすれとも、また、教えない。「アイヌばやめれ」つうんだから、うちの親父は。

当時、日本のアイヌ民族に対する同化政策（平田 2009: 29-42）によるなど影響もあり、アイヌ民族は、その子弟に対するアイヌ語教育をあまり施さなかった。したがって、上田や富菜については、日常会話でアイヌ語を使用する環境には置かれていなかったとみるべきであろう。

上記のことから、アイヌ第二世代を話者もしくは筆者とする言語テキストに、アイヌ第一世代の場合と同様、交差対句の使用という特徴が見出される理由の一つは、アイヌ第二世代が生れ育っていく過程で、彼らにとっての身近な人たち（おそらく、その多くがアイヌ第

一世代であると予想される)が使用する日本語の特徴の影響を受けたことによると筆者は考えている。逆に言えば、このことは、アイヌ第二世代の言語的特徴が、仮に、アイヌ第一世代が使用する言語の影響であるとするならば、当時、アイヌ第二世代をとりまいていた人たちも交差対句を使用していたことを証左している。

8. おわりに

本稿で行った、アイヌ第二世代話者(もしくは筆記者)は、上田・富菜・達星の3名のみである。筆者としては、引き続き、上田・富菜・達星による他のテキストや、他のアイヌ第二世代話者による言語テキストの特徴についての調査を進めたいと思っている。

引用文献

- アイヌ民族博物館(1997)『アイヌ民族博物館伝承記録3・昔話 上田トシのウエペケレ』,アイヌ民族博物館
- Ambar, Saladin M. "Malcolm X at the Oxford Union." *Race & Class* 53.4 (2012): 24-38.
- 伊波 普猷(1976)『伊波普猷全集』第11巻,平凡社
- 達星 北斗(1995)『達星北斗遺稿 コタン』(増補版),草風館
- 大喜多 紀明(2011)「『アイヌ神謡』の修辞パターンから心意を辿る(上) —「交差対句」を糸口として—」『西郊民俗』217号,24-32,西郊民俗談話会
- 大喜多 紀明(2012a)「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11号,181-213,アジア民族文化学会
- 大喜多 紀明(2012b)「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辞」,『比較民俗研究』,27号,133-144,比較民俗研究会
- 大喜多 紀明(2012c)「アイヌの挨拶表現と民俗的修辞構造」『ポリグロシア』22巻,157-165,立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明(2012d)「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」『ポリグロシア』23巻,127-138,立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明(2012e)「『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラについての考察—修辞論的視点より—」『人間生活文化研究』22号,147-158,大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多 紀明(2012f)「アイヌ口承文芸「ハリツ クンナ」と「パナンペ尻滑り」についての考察」『国語論集』9号,158-166,北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大喜多 紀明(2012g)「アイヌ民族による散文説話「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」についての交差対句資料—話者が口承を記憶するメカニズム—」『人間生活文化研究』22号,159-170,大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多 紀明(2013a)「アイヌ民族による日本語筆記資料についての考察—知里幸恵の『アイヌ神謡集』「序」を題材として—」『ポリグロシア』24巻,190-200,立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明(2013b)「知里幸恵の文章にみられる修辞技法—アイヌの民俗的修辞による影響—」『北海道言語文化研究』11号,99-112,北海道言語研究会

- 大喜多 紀明 (2013c)「樺太アイヌの「トゥイタ_ハ」に見出せる交差対句について」『年報人類学研究』,3号,169-191,南山大学人類学研究所
- 大喜多 紀明 (2013d)「知里幸恵の『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカ_ラにおける交差対句資料—アイヌ民族の修辞技法」『国語論集』10号,104-126,北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大喜多 紀明 (2013e)「アイヌ口承テキストに確認される2種類の修辞配列パターンについての資料」『人間生活文化研究』23号,77-96,大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多 紀明 (2013f)「樺太アイヌの口承文芸における語りの構造—浅井タケのトゥイタ_ハ「カラスと娘」の場合—」『知床博物館研究報告』36号,斜里町立知床博物館(印刷中)
- 岡野 哲 (1997)「文化と文明:「言語と文化」考(1)」『北海学園大学人文論集』,9号,1-29,北海学園大学
- 小川 正人 (2003)「調査報告 北海道アイヌ協会浦河支部創立当時のこと:富菜愛吉」,『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』9号,117-145,北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 小野 米一 (1992)「アイヌ話者の日本語北海道方言」『学芸国語国文学』24,115-128,東京学芸大学
- 柿原 妙子 (2011)「<視ること>をみつめる—ソネット148と光学のレトリック—」『リーディング』32号,2-12,大学院英文学研究会
- 切替 英雄 (2007)「アイヌの地理的認識と上(かみ)と下(しも)」,津曲敏郎(編),『環北太平洋の言語』14号,35-56,北海道大学大学院文学研究科
- 金田 一京助・知里 真志保 (1936)『アイヌ語法概説』,岩波書店
- 櫻井 義秀 (2012)「アイヌ民族の宗教意識と文化伝承の課題」『北海道アイヌ民族生活実態調査報告:Ainu Report』,その1(日本語版・増刷版),97-104,北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- 佐藤 知己 (2002)「アイヌ語千歳方言のkaneの用法」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』8,61-88,北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 鄭芝淑 (2006)「日本と韓国のことわざの特徴—暫定PSリストに基づく分析—」『多元文化』6号,57-68,名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻
- 田村 すず子 (1988)「二風谷の昔話と歌謡・神謡:民話1」『アイヌ音声資料』5号,4-11,早稲田大学語学教育研究所
- 平田 末季 (2009)「開拓使仮学校附属「北海道士人教育所」におけるアイヌ教育の実態:教科書から見る明治初期のアイヌ教育政策」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』5巻,29-42,北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集制作委員会
- 黄 文溥 (2009)「明治期の口語の小説における動詞の連用中止形の文体的特徴に関する一考察」『日本言語文化研究』13,1-18,日本言語文化研究会
- 本田 優子 (2009)「アイヌ口承文芸にみられる「史実」と交易」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』15,39-56,北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 村井 源 (2009)「マルコ福音書の多層集中構造」『日本カトリック神学会誌』20,65-95,日本カトリック神学会

執筆者紹介

氏名:大喜多 紀明

アイヌ語を母語としないアイヌ民族による言語テキストに見出される交差対句 大喜多 紀明
—民俗的修辞技法の継承—

京都民俗学会会員

Email : ohkitan@yahoo.co.jp